

私の授業の工夫

教育人間科学部 数学教育講座 清野 辰彦

教育人間科学部には、教育・教科教育に関する専門的な内容を学習する授業、各教科の高度な内容（代数学、解析学等）を学習する授業など様々な授業が開講されています。ここでは、数学教育に関する専門的な内容、特に、数学の授業力の向上を目的とした授業「中等数学科教育法Ⅱ」について、ご紹介いたします。

「中等数学科教育法Ⅱ」は、「中等数学科教育法Ⅰ・Ⅲ」を受講した学生（受講している学生）が受講します。つまり、3つの授業ともに、同じ一人の教員とほとんど同じ学生で構成され、展開されていきます。「中等数学科教育法Ⅰ・Ⅲ」では、数学教育の目標論、教材論、授業論、評価論を学習し、「中等数学科教育法Ⅱ」において、学習した内容や方法を踏まえ、学生自身がそれらを授業として具現化していくことになります。もう少し、具体的に述べてみます。

「中等数学科教育法Ⅱ」では、まず、学生が4つのグループに分かれ、グループごとに中学校・高等学校の数学教科書の中から1つの単元を選び、その単元の学習内容の授業化を行います。具体的には、指導案を作成し、1人の学生が全員の前で、模擬授業を行います。指導案は、グループで何度も集まり、1、2週間かけて作成されます。この過程を通して、自分の数学教育観、教材観、授業観を外化することの面白さと難しさを感じてほしいと考えています。次に、第4時～第14時まで、上記の授業化を全学生が1人ずつ行っていきます。自分で指導案、教具、ワークシート等をつくり、模擬授業をするのです。

模擬授業の際、他の学生は、生徒役となります。生徒役の学生は、授業する内容に合わせて、何が既習事項であるか、生徒の典型的なミスコンセプションは何か等を踏まえた上で、発言することが求められます。この経験を通して、生徒側に立った視点を獲得してほしいと考えています。

模擬授業後は、授業者は、授業のねらい・工夫した点を述べ、他の学生（私も含めて）は質問、意見、対案を述べ合います。研究授業の後の協議会のシステムを理解するとともに、協議を通して、教材の見方や授業の見方を深めることを意図しているのです。

この授業では、指導案をつくり、模擬授業をするだけではありません。授業後に、記録した音声やビデオの映像を見て、全員が詳細な授業記録を作成するとともに、協議を踏まえ、修正指導案を作成します。教師は、反省的実践家であり、自分の授業をより良い授業へと変えていく存在です。上記の一連の過程を経験することを通して、教師のあるべき姿を理解してほしいと考えています。

「第17回FDフォーラム」参加報告

教育人間科学部 FD委員会副委員長 大西 良博

2012年3月3・4日の2日間、京都産業大学で行われた「第17回FDフォーラム」に参加してきました。2日目はいくつかのミニシンポジウムが同時開催されましたが、こちらを省略し、以下、第1日目について書きます。これは、ほぼ1000名に及ぶ全員が参加の巨大シンポジウムです。法政大の児美川教授、資生堂の人事部の深沢氏、京産大の松高准教授の3名からそれぞれ提言があり、この3方とコーディネーターの村上准教授（京都外語大）とベネッセの松本氏を加えた5名によるパネルディスカッションがありました。

今回のテーマ「企業が求める人材って、大学が育成しないとダメ？」について議論されましたが、もう少し深まりがあってもよかったと感じます。ただし、「企業と大学の思いが予定調和する必要はなく、それぞれの追求する学生像が結果的に一致する、というのが大事なのでは？」「この変化の激しい時代だからこそ、高校進学、大学進学、新卒採用というまっすぐな道を歩まなくても／歩めなくても新しいやり方で仕事を見付けている人は多いはずで、様々な仕事への道をできる限り紹介、または提示していくことが必要なのではないか」との児美川氏の見解は、私の思いを代弁していました。



Faculty Development INVITATION

山梨大学教育人間科学部

第29号

March.30.2012

2011年度 教育人間科学部FDフォーラム

「大学の授業を考える 一学生の視点から」

日時／2012年1月11日(水) 14:00～15:30

場所／教育人間科学部J号館5階：多目的教室

教育人間科学部・教育学研究科合同のFDフォーラムを、下記の要領で実施しました。

今回は、特に、大学生・大学院生が、大学・大学院の授業をどのように受講し、大学・大学院で学ぶことについてどのようなイメージを抱いていたか意味を感じていたりするのか、そして、大学の授業に求めることなどを率直に語ってもらい、授業を受ける側の学生の視点から大学の授業を検討するというのをねらいに開催しました。フォーラムでは、教員7名、学部生9名、大学院生（含・教職大学院、内地留学）4名の参加があり、学生・大学院生と教員が大学の授業の在り方についてフリー・ディスカッション形式で行いました。

参加者の学生・大学院生の皆さんが語ってくれた内容で主だったものを紹介します。

大学の授業のイメージについては、肯定的な意見として、「やりたいことがやれるというイメージがある」（深澤さん、発達教育コース2年）、「自分がやりたい専門的なことが学べる」



（田村さん、発達教育コース2年）という意見、「ただ問題が解ければよかった高校の授業と違い、大学の授業はしっかりと理解しなければ進めないと感じている」という意見（早瀬さん、数理情報コース1年）や、「同じ学問の枠組みの中でも、その主旨によって学び方や学ばせ方が違っているということがおもしろい」（浅野さん、数理情報コース1年）という工学部の授業と教育人間科学部の授業を比べての意見などが出されました。

また、グループワーク型の授業など、学生参加型の授業のよさ（沖さん、教科教育コース3年）を指摘する意見もあり、近年の大学教員による意欲的な授業づくりの取り組みを学生側は肯定的に受け止めていることがうかがわれました。

教職大学院の方々からも、「理論と実践の連続的な精察が出来る幸せがある」（進藤さん、教職大学院1年）、TTによる授業や半年間の実習の利点と実習システムへの要望（日原さん、教職大学院1年）、「学ぶおもしろさだけでなく、自己の人間的な深まりを感じながら学べている充実感がある」（笠井さん、内地留学）などの意見が出されました。

他方で、大学の授業で課題だということに

関しては、大人数の講義型の授業の問題点や、授業における評価基準や教員の出席管理に関する疑問（片田さん、教科教育コース3年）、自分が学びたい専門分野を扱う教員がいないことがあることの問題（佐藤さん、共生社会コース3年）が出されました。

大学の授業への要望として、「課程・コースで受講する科目がある程度決まってしまうので、学生の多様なニーズや希望にもっと応えられるものが必要ではないか」（古屋さん、大学院1年）という学部のカリキュラム編成に対する要望や、「教育実習経験を振り返ると、自分の意見を相手とやりとりしながら作り上げていくような活動をもっとほしい」（山崎さん、教科教育コース3年）、「グループワークでの学生の意見を集団で検討するような活動がほしい」（渡辺さん、教科教育コース3年）という積極的な意見などが寄せられました。

これらの参加者の意見を受けて、各参加者が自由に意見を語り、和やかな雰囲気の中で活発な議論がなされました。教員自身が大学の授業について日頃感じていること（授業の出席のこと、シラバスのこと、課題に感じていることなど）や、大学の授業の在り方をどう考えているかなど、率直な意見が出されました。また、大学の授業は、それまでの「教



育を受ける権利」（憲法26条）から、「学問の自由」（憲法23条）の世界へ移行しているのではないかという石塚委員の意見に一同納得。あらためて大学の授業とは何かを参加者一同で深く考えることも出来るなど、充実したフォーラムになりました。

最後に、渡辺さん（教科教育コース3年）から「自分は、FDの存在自体を知らなかった。学生が授業について意見を言える場があれば、そういうFDになれば、僕たちの意見も生きる場になるのではないか」といううれしい意見がありました。FD委員会としても、このように学生の授業に対する要望を受け止め、議論できる場を、これからも積極的に設けようと思います。

教育人間科学部 FD委員会委員
高橋 英児

附属学校園における新任教員の初任者研修

教育人間科学部では、新任教員のための初任者研修を行っています。2011年度は、従来の事務管理系に関する研修会に加えて、FD委員会委員との懇談会形式による研修会と、附属学校園における研修会という3つの研修を企画・実施しました。特に附属学校園における研修会は、本学の附属学校園研究プロジェクトの提言にも合致するもので、参加された先生方もそれぞれ非常に有意義な1日を過ごされたと聞いております。その中から、10月に附属特別支援学校へ行かれた木島章文先生と、7月に附属幼稚園に行かれた塚越奈美先生に、その研修の様子を紹介していただきます。

教育人間科学部 保健体育講座 木島 章文

私自身、研究資料で自閉症やダウン氏症候群などの病態、知覚運動学的特性について読むことがあり、兼ねてから本校の見学を希望

しておりました。うかがってみて、まず病態や水準に応じて行動形態がこれほどまでに多様であったことに驚きました。各病態に対して各教諭が異なるご指導されている様子から、

各生徒の個性ならびに状況に応じた反応を把握することが学級運営に不可欠であることを実感しました。

個人的な興味の多くは中学部体育の見学・参加プログラムにありました。見たところ身体発達状況ならびに運動能力そのものに関しては予想より劣ったところはなく、身体接触、並走、手引きなどによって活動量や意欲を高めることに可能性を感じました。こういった介入の効果は健常児にも通ずるところであります。当校においてはただし、意欲の個人差（身体運動活動に対する動機づけの方向、強さの差）がことのほか大きい印象を感じました。この差を許しながらも各々を職業人へと育成する機能とは何であろうかと勝手なことを考えながら自室へと帰りました。最後に、

教育人間科学部 幼児教育講座 塚越 奈美

初任者研修の一環として、7月に附属幼稚園で1日体験をさせていただきました。所属講座が幼児教育であることや教育実習委員会で幼稚園実習の担当になったこともあり、1日体験以前にも保育参観などをさせていただく機会を多く得てきました。その中で、子どもたちが時にそれぞれの発達の様相の違いからぶつかりあいをしながらも生き生きと生活をしている様子や、先生方が日ごろから子どもたちの様子を丁寧に記録し、カンファレンスを積み重ねてきている様子を拝見してきました。しかし、教育課程との関係性からどの



今まで経験してきたものに比べて、給食が意外なほどにおいしかったことを付記します。この試食の席に加えて野球クラブへの参加の機会を設けていただいた先生方のご配慮に御礼を申し上げます。



学習活動（短距離走）の様子〔走者は筆者〕

ような保育計画を立てているのかなどについて詳しい説明をうかがう機会はありませんでしたので、今回の1日体験は、附属幼稚園の保育について保育計画という視点から学ぶ大変良い機会となりました。

附属幼稚園独自の教育目標「ともに生活を作り出すしなやかなかしこさをもった子ども」には、それぞれの年齢の生活に見合った下位目標を設定されています。それらの目標は先生方が子どものあるべき姿として設定したのではなく、これまでの保育の中でみられた各年齢の子どもたちの育ちの姿から数年間かけて導いたものであることをうかがい、子どもの願いを大切にする保育とは何か、保育者の役割とは何かについて改めて考えることができたように思います。

今回の1日体験を通して、附属幼稚園の保育理解が深まったことはもちろんですが、幼稚園教諭免許状に関わる科目を担当する者として、授業内で学生に意識させたい心構え等についても考える機会となりました。このような機会を与えてくださったFD委員会の先生方と附属幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。